関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

# <特集論文 ： 「コロナ禍」の人間，社会，そして福祉 ： 文明と環境をめぐって> 体育会に所属する大学生の大学への帰属意識に関する研究 ： コロナ禍における体育会の意義について考える



| | |
|---|---|
| 著者 | 林 直也 |
| 雑誌名 | 人間福祉学研究 |
| 巻 | 14 |
| 号 | 1 |
| ページ | 91-103 |
| 発行年 | 2021-12-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10236/00030009 |

特集論文：「コロナ禍」の人間，社会，そして福祉―文明と環境をめぐって

# 体育会に所属する大学生の大学への帰属意識に関する研究

## ――コロナ禍における体育会の意義について考える――

林　直也
関西学院大学人間福祉学部教授

● 要約 ●

本研究の目的は，大学生を対象に体育会学生と非体育会学生において，大学への帰属意識，大学満足，就学意欲，大学不適応について比較し，両者の違いを検証することである．そのことで，コロナ禍における体育会の意義について考察する．有効回答標本数は572である．

分析の結果，大学への帰属意識は体育会学生の方が非体育会学生よりも有意に高いことが明らかとなった．他にも，「大学志望度が第一志望の学生において，体育会学生の方が帰属意識は有意に高い」「一般入試による入学者において，体育会学生の方が帰属意識は有意に高い」「新型コロナウイルスの影響を強く受ける大学1，2年生において，体育会学生の方が帰属意識は有意に高い．また，3，4年生も同様に，体育会学生の方が帰属意識は有意に高い」ことが明らかになった．

これらのことより，体育会へ所属することは大学への帰属意識を高める一手段となり得ることが示唆された．

● Key words：大学への帰属意識，居場所，体育会，新型コロナウイルス感染症

人間福祉学研究，14（1）：91-103，2021

## 1．緒言と目的

2020年，世界は新型コロナウイルス感染症（COVID-19以下，新型コロナ）の影響により混迷を極めた．消費や企業活動は滞り，経済はまひ．リーマン・ショックを超える戦後最悪の不況が企業に襲いかかった（日経クロステック，2020）．スポーツ界では，世界的なスポーツイベントが同一国にて3年連続で開催されることが史上初であったことを称し，日本における2019年から2021年までの3年間を「ゴールデン・スポーツイヤーズ」（間野，2015）と呼んだ．しかし，東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会は2021年へ延期，ワールドマスターズゲームズ2021関西もそれに合わせる形で2022年へ延期されるなど，まったく違うものとなってしまった．

厚生労働省の自殺統計に基づき文部科学省がまとめた児童生徒の自殺者数の推移（文部科学省a，website）によると，2020年は479人で過去最多，小中高校生いずれの年代でも過去最多だったという（図1）．時期については新型コロナによる長期休校が明けた6月や8月に多くなっている．

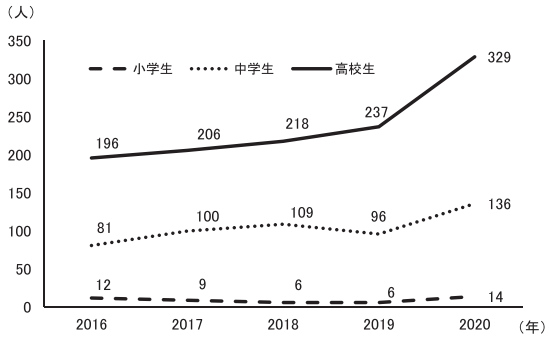


図１　児童生徒の自殺者数の推移（文部科学省 a website をもとに筆者作成）

新型コロナの影響は，大学教育にも例外なく押し寄せた．2020 年，数多の大学で卒業式・入学式は中止され，緊急事態宣言解除後もキャンパスは閉鎖，授業の多くはオンライン化された．2021 年現在もオンライン授業は継続中である．学生たちは大学へ行くことができず，友達もできない．夢見てきた海外留学の道も閉ざされ，研鑽の集大成の場である各種大会，コンクール，イベントも軒並み中止．「本当に大学生になったのだろうか」「自分の居場所はどこにあるのか」．そんな気持ちに苛まれるが，拡大抑止のため自由に外へ出ることもできない．感染者に占める 30 歳代までの割合が高い（2020 年 4 月時点）ことから，「東京都は感染しても症状が出にくいとされる若者が自覚のないまま外出を続け，重症化リスクが高い高齢者らの感染拡大を招くのを危惧している」と報道されたり（「『3 密』危険 SNS で」，2020），吉村洋文大阪府知事が SNS を通し，「現時点での感染拡大の傾向ポイントは，「若者」と「夜の街」です」と発信されたりした（吉村洋文 Twitter，2020.7.12）．若者は批判にさらされ，大学生の自由はますます奪われていった．

ウィズコロナ時代を迎え，テレワークやオンライン授業という新たな生活様式が生み出され，地理的，時間的な制約から解放される社会が確立されつつある．しかしながら，このような非接触型，非対面型社会は集団や組織に対する帰属意識を薄弱化させる恐れがある．これまで，大学では，不本意入学による自校理解や帰属意識の低さを原因とした中途退学者の増加が問題視されてきた．新型コロナによる影響はこれらの問題をさらに加速させるのではなかろうか．通学できず，閉塞感や孤独感は日増しに高まり，特に 2020 年度，2021 年度入学生は新たな友人もできない．大学入学直後の教育に関して，安原ら（2021）は，「この期間の教育は，新入生の大学への印象を大きく左右する．自らの大学への帰属意識や満足感を持つかどうかは，この時期に提供される教育の質に大きな影響を受ける」と指摘する．通学が制限され，対人コミュニケーションの機会もままならない状況では，自校理解や帰属意識は醸成されず，自らのアイデンティティとして育っていくはずもない．

文部科学省 b（website）によると，2020 年 4 月から 10 月までの中途退学者率は前年よりも若干下がった（前年度比 0.84 %）ようだが，これは「経済的困窮」による中途退学者を抑えるための授業料の納付猶予や減免などの効果だとみられている．その反面，「学生生活不適応・修学意欲低下」による退学者の割合は拡大している（2012 年度比 12.9 % 増，前年度比 0.7 % 増）．松井ら（2010）は，大学不適応に影響を及ぼす要因として，友人関係の希薄さ，授業理解の困難さ，入学目的の曖昧さを示し，高木（2006）は，大学・アルバイト先・部活動といった組織へのコミットメントが大学生の充実感に影響することを明らかにしている．中村・松田（2013；2014）は，大学への帰属意識は，大学不適応に直接的な負の影響を与える要因であり，大学への帰属意識には友人関係，教員への好感，施設設備充実，入学目的の明確さが正の影響を与えることを示している．

ウィズコロナの今，対面（リアル）授業がない，慣れないオンライン授業により授業が理解できない，友達ができない，教員とのコミュニケーションがとれない，施設・設備が自由に使えない，部活動ができない，アルバイトができない，結果として大学生になった実感がないなど，大学不適応や充実感，大学への帰属意識にポジティブな影響

を与える要因がことごとく機能不全に陥っている．一方で，「大学は高校までに比べ人間関係が総じて薄い．だが企業，家族関係が薄くなる中，帰属する場として大学がその受け皿として再注目されている」（中村，2020）と言われるように，大学の存在意義は大きい．そのため，新型コロナに直面している今こそ，「大学は大切な居場所の一つ」だと感じることが，自らのアイデンティティの強化や閉塞感，孤独感の緩和につながると考える．このことは「学生生活不適応・就学意欲低下」による中途退学者を減少させる一助にもなり得ると信じる．

本研究では，学生が「大学を居場所として感じる度合い」について，大学への帰属意識に着目したい．帰属意識は「集団への満足感や信頼感，一員である誇りや支持など」とされる（尾高，1963）．諸星・山口(2020)は，帰属意識について，「人は集団に入り，様々な個性を持ったメンバーとかかわる中で互いに影響し合い学ぶことがあり，援助関係を含む友情が確立し，加えて互いに安心感が出現し，自分を出すことができ，その結果，その集団に対する帰属意識が生まれ，その集団が心の居場所となる」と述べている．これが，帰属意識を居場所としての度合いと捉えた根拠である．

そして，本研究では大学体育会に所属する学生の帰属意識について検証する．体育会とは，大学の運動部が連合して組織する学生自治会のことである．そのため，学生それぞれ所属する集団は違えども，大学に帰属し，その名を背負うこととなる．ゆえに，所属集団への帰属意識を通して大学への帰属意識も醸成されるのではなかろうか．これを検証するため，体育会に所属する学生（以下，体育会学生）と所属しない学生（以下，非体育会学生）とで大学への帰属意識の比較を試みたい．

これまで，大学生における運動・スポーツの効果に着目した研究は数多く行われ(阿知波・山田，2012；都筑ら，2009；藤原・堺，2010；伊藤ら，2016)，体育会学生に着目した研究も行われている．体育会に所属する学生は生活全体に対する満足度が高く，中でも人間関係やスポーツ活動に対する満足度が高い（河合ら，2007），運動部や運動系サークル加入者の方が生活への満足度が高い（岩田，2015），部活動で活動する学生は愛校心が高い（大石ら,2007）などである．しかしながら，河合ら（2007）の研究は，体育会学生と同好会や医学支部所属学生間での比較であり，非体育会学生との比較ではない．岩田（2015）の研究は，日頃の生活に対する満足度が対象となっており，大学への帰属意識や満足度には着目していない．大石ら（2007）の研究は，部活動所属の有無による愛校心の違いに着目しているものの，対象が女子大学生に限定されている．また，金（2013）は大学への愛着と部活動・サークル活動との間に相関関係は認められないと述べているものの，ここでの部活動・サークル活動は体育会に限定したものではない．

新型コロナの影響を受け，通学は制限され，授業の大半がオンライン化された中，大学への帰属意識を抱く機会は限られている．その中で，体育会は活動人数や時間の制限があるものの，活動を継続していると聞く．目標・規範・価値観などを共有し合っている集団であれば，人間関係を構築しやすく，コロナ禍の中でも貴重な学生の居場所として機能するのではなかろうか．そのことが間接的に大学への帰属意識へ影響を及ぼす，これが本研究における仮説である．仮説が採択されるなら，体育会に所属することの意義を示すデータとなる．

加えて，本研究では大学満足，就学意欲，大学不適応にも着目する．粂原・社浦（2011）が,「大学において居場所感を有していない学生は，大学に居場所感を有している学生よりも，大学生活における不安を高く感じている」と述べていることから，体育会という存在が物理的・精神的な居場所となるのであれば，そのことが大学不適応を低下させ，大学満足度や就学意欲を高めると予測す

る．

以上のことから，本研究の目的は，大学生を対象に体育会学生と非体育会学生において，大学への帰属意識，大学満足，就学意欲，大学不適応について比較し，両者の違いを検証することである．そのことで大学における体育会の意義について考察したい．

## 2．研究方法

### 2.1．データ収集

調査対象者は，K 学院大学の学生とし，質問紙を用いて調査を実施した．648 人へ配布し，回収した質問紙から欠損値のあるものを除外したところ，572 人の有効回答を得ることができた（有効回答率 88.3 %）．なお，調査期間は 2021 年 6 月 17 日から 8 月 13 日までである．

### 2.2．調査項目

大学への帰属意識の測定には，中村・松田（2014）で使用されている尺度（8 項目で構成）を使用し，6 件法で回答を求めた．大学満足，就学意欲，大学不適応については中村ら（2016）で使用されている尺度を使用した．本尺度は 14 項目（6 件法）で構成されている（具体的な項目については表 1 参照）．ただし，大学満足を構成す

表 1　各尺度を構成する項目と信頼性係数（α 係数）

| | 項　目 | α |
|---|---|---|
| 大学への帰属意識 | 1　K 学院大学（以下，K 学大）を気に入っている | .879 |
| | 2　自分にとって K 学大は居心地がよくて，落ち着くことができる | |
| | 3　K 学大は，自分にとって大切な居場所である | |
| | 4　K 学大が好きである | |
| | 5　私は，K 学大の雰囲気になじめていない | |
| | 6　私は，K 学大に愛着がある | |
| | 7　私は，K 学大に受け入れられていると思う | |
| | 8　K 学大の学生であることを誇りに思う | |
| 大学満足 | 9　この大学に入って正解だったと思う | .871 |
| | 10　大学生活に満足している | |
| | 11　大学の勉強に満足している | |
| | 12　大学にくるのが楽しい | |
| 就学意欲 | 13　大学で学ぶことによって，自分の学力をさらに向上させたい | .883 |
| | 14　大学でさまざまなことを学んで知識や教養を増やしたい | |
| | 15　大学で一生懸命学ぶことは，将来の仕事や人生に必ずプラスになると思う | |
| | 16　勉強していろいろなことを学ぶのは楽しい | |
| 大学不適応 | 17　授業がある日なのに大学を休みたくなることがある | .798 |
| | 18　まだ授業があるのに，意欲がわかなくて大学から早めに帰宅したいと思うことがある | |
| | 19　大学生活がつらいと感じることがある | |
| | 20　大学を卒業できないかもしれないと思ったことがある | |
| | 21　大学をやめようかと思ったことがある | |

る5項目のうち，「この学科に入って正解だったと思う」は削除した．これは，調査対象者が所属する学部に学科が設置されているとは限らず，本項目に回答できない者が多数存在すると考えたからである．

その他の項目として，性別，学年，体育会所属の有無，受験形態，大学の志望度を尋ねた．受験形態を尋ねた理由は，一般入試による入学者は退学意向を持つ割合が高いことが報告されており（ベネッセ教育総合研究所，website），これは，一般入試入学生の方が学ぶ目的を持ちながらそれが実現しなかったケース（不本意入学）が多いと考えられるためである．一方で，指定校推薦入試など，早期に確実に合格できるという「入学しやすさ」で進学先を決定した学生は，大学の教育内容や校風などが後回しにされる傾向があり，そのような決め方で大学を選んだ学生は，進学後も愛校心を持ちにくい(大石ら, 2007)．このことから，受験形態別に帰属意識などの違いについて検証を行うこととした．大学志望度を尋ねた理由も同様で，志望度による帰属意識の違いについて検証するためである．さらには，藤井（1998）が女子学生の方が男子学生よりも大学生活への不安を強く感じていることを示し，清宮ら（2015）も体育系大学生において，女子学生の不安が強いことを明らかにするなど，性別による違いが報告されている．このことから，男女ごとの比較を行い，性別による違いの有無についても検証する．

### 2.3．測定尺度における信頼性

各尺度における信頼性検討のため，Cronbach α係数を算出した．その結果，大学への帰属意識（.879），大学満足（.871），就学意欲（.883），大学不適応（.798）となり，信頼性担保に必要な基準値（.70以上）（小塩，2004）をすべて上回った（表1）．

このことから，本研究ではすべての項目を採用し，分析を進めることとした．

### 2.4．分析方法

最初に，収集された全データを対象に，体育会学生と非体育会学生の間で大学への帰属意識，大学満足，就学意欲，大学不適応について比較分析（独立したサンプルのt検定）を行い，有意な差の有無について検証する．その後，大学志望度，受験形態，学年，性別ごとに体育会学生と非体育会学生間で比較を行う．

なお，分析使用ソフトはSPSS Statistics27，有意水準は5％とした．

## 3．結果と考察

本研究では，体育会学生と非体育会学生の違いについて検証するため，体育会・文化総部の「どちらでもない」学生を非体育会学生とし，分析を進める．よって，文化総部所属学生を分析から除外した．その結果，分析に用いる標本数は544となった．

### 3.1．調査対象者の個人的属性

表2に調査対象者の個人的属性を示した．性別は男性58.6％，女性41.2％で男性の方が多い．学年は1年生から順に37.3％，42.8％，14.9％，5.0％となり，約80％が1，2年生となった．1，2年生は入学以来ほとんど大学に通うことができず，新型コロナの影響が特に大きい世代だといえる．コロナ禍における体育会の意義を考えるうえで，1，2年生のデータは貴重な存在である．体育会所属の有無については，体育会学生が40.8％，非体育会学生が59.2％となった．受験形態では，「その他」が過半数を占めている．「その他」とは指定校推薦，協定校推薦などの推薦入試が考えられる．一般入試比率は25.7％であった．大学への志望度は「第一志望」が75％を超え，不本意入学生は少ないと思われる．

表２　個人的属性（n＝544）

| | | % |
|---|---|---|
| 性　別 | 男　性 | 58.6 |
| | 女　性 | 41.2 |
| | 答えたくない | 0.2 |
| 学　年 | 1年生 | 37.3 |
| | 2年生 | 42.8 |
| | 3年生 | 14.9 |
| | 4年生 | 5.0 |
| 体育会所属の有無 | 体育会学生 | 40.8 |
| | 非体育会学生 | 59.2 |
| 受験形態 | 一般入試 | 25.7 |
| | AO 入試 | 8.6 |
| | スポーツ入試 | 13.6 |
| | その他 | 52.0 |
| 大学志望度 | 第一志望 | 76.8 |
| | 第二志望 | 11.6 |
| | 第三志望 | 11.6 |

## 3.2. 体育会学生と非体育会学生における比較

### 3.2.1. 全データでの比較

図２に全データでの比較結果を示した．大学への帰属意識（t = 4.09　p < .001），大学満足（t = 5.57　p < .001）において体育会学生の方が有意に高く，大学不適応（t = − 3.13　p < .01）については有意に低いことが明らかとなった．

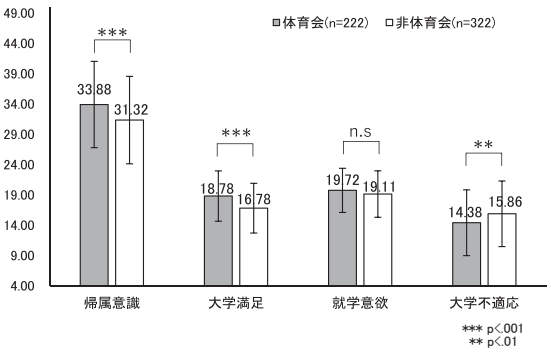


図２　全データでの比較結果（筆者作成）

体育会学生は対外試合時，大学名や校章の入ったユニフォームを身にまとい，大学の代表選手として出場する．いわゆるインカレ（intercollegiate）とは大学による対校戦であり，大学として勝ち負けが決する．出場機会に恵まれない学生であっても，代表選手になることを目指し練習を重ね，試合時はチームの勝利を願う．次こそは自分が，という思いを持ちつつ，チームの公式ジャージ姿で部旗などを掲げながら応援やサポートを行う．このように，体育会学生は正選手，控え選手関係なく，大学を意識する機会が多く，大学への帰属意識が醸成されやすい環境にあるといえる．単純に大学での滞在時間の長さの影響もあるかもしれないが，たとえ滞在時間が長くとも，大学を意識する状況や環境がなければ帰属意識が高まることはないだろう．

また，体育会学生は大学満足も有意に高く，大学不適応は低いことが示された．これは中村ら（2016）の「大学への帰属意識が高い群は大学満足度，就学意欲が高く，大学不適応は低い」という報告をおおむね支持する結果となった．体育会学生は日々の活動の中で大学を意識する機会が多い．次第に大学への帰属意識が高まり，大学を自らの居場所と感じ始める．そして，その中で様々な学び，経験を重ねることで成長していく．それが大学満足を高め，不安を抑える働きを持つのだろう．

一方で，就学意欲には差が認められなかった．これにはいくつかの要因が考えられる．まず，大学志望度の影響である．中村・松田（2013）が，就学意欲は「入学目的の明確さ」に影響を受けることを明らかにしているが，本研究の対象者は，およそ 75 %が第一志望での入学者である．そのため，多くの学生が明確な入学目的を持っていると考えられる．加えて，見舘ら（2008）は，「教員とのコミュニケーション」が学習意欲に影響を及ぼすことを明らかにし，作田（2007）も，「授業」「授業以外」両方において教員とのコミュニケーションが学習意欲に影響することを示している．

本研究の約80％が1，2年生である．1，2年生は対面授業が制限され，同時に教員とのコミュニケーションもままならないまま現在に至っている．これらのことが影響し，差が生じなかったと推察する．

### 3.2.2. 志望度・受験形態ごとの比較

前項にて，体育会学生は大学への帰属意識が有意に高いことを示した．しかし，体育会学生は一般入試での受験割合が低く，さらには受験時の志望度が高いことが予想される．つまり，不本意入学者が少なく，そのことが帰属意識に影響している可能性がある．体育会に所属することで高くなったわけではなく，受験時・入学時から当該大学にあこがれや好意を持ち，それが高い帰属意識へとつながるケースである．

この部分を検証するため，志望度ごとに分析を行った．結果，第一志望群では，体育会学生の方が大学への帰属意識（$t = 2.38$　$p < .05$），大学満足（$t = 4.10$　$p < .001$）が有意に高く，大学不適応（$t = -2.25$　$p < .05$）が有意に低い結果となった（図3）．第二・第三志望を合わせた群においても同様の結果となった（図4，大学への帰属意識 $t = 2.55$　$p < .05$，大学満足 $t = 2.25$　$p < .05$，大学不適応 $t = -2.27$　$p < .05$）．この結果より，志望度が同じ学生同士であっても体育会学生の方が帰属意識や大学満足が高いことが明らかとなった．諸星・山口（2020）は，「学生同士や地域との交流機会が増える集団活動を奨励し，集団への帰属意識を高めるように働きかけることが，個人の自尊感情や他者受容を高め，結果的に集団への適応力が高まり，大学の中途退学や休学を減少させることにつながる」と述べている．本研究の結果は，体育会が自尊感情や他者受容を高める場として活用できることを示唆している．不本意入学であっても，体育会に所属し，志を共にする仲間とともに活動することで，自尊感情や他者受容が高まり，それが所属集団への帰属意識，ひいては大学への帰属意識へとつながっていくと考えられる．

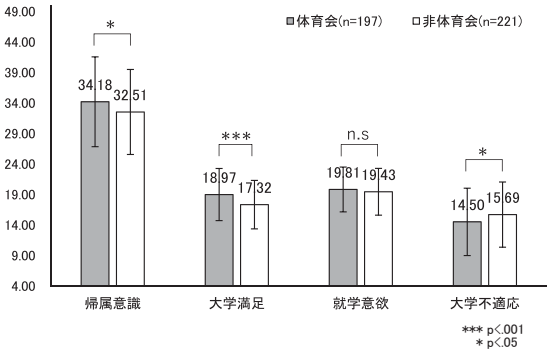


図3　第一志望群での比較結果（筆者作成）

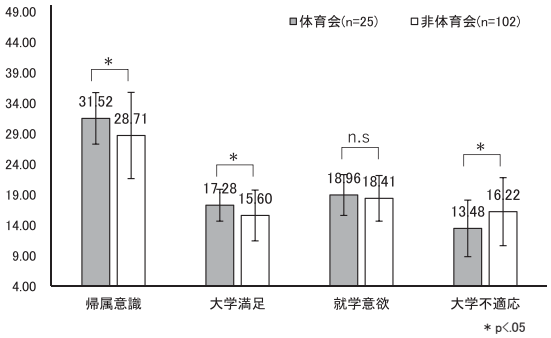


図4　第二・三志望群での比較結果（筆者作成）

なお，受験形態ごと，特に一般入試群を対象に分析した結果，ここまで同様，体育会学生の方が大学への帰属意識（$t = 2.79$　$p < .01$），大学満足（$t = 2.74$　$p < .01$）が有意に高く，大学不適応は有意に低い（$t = -2.11$　$p < .05$）ことが示された（図5）．一般入試による入学者は不本意であるケースも多く，退学意向を持ちやすいとされるが，体育会学生は帰属意識などが高く，大学不適応も低い結果となった．

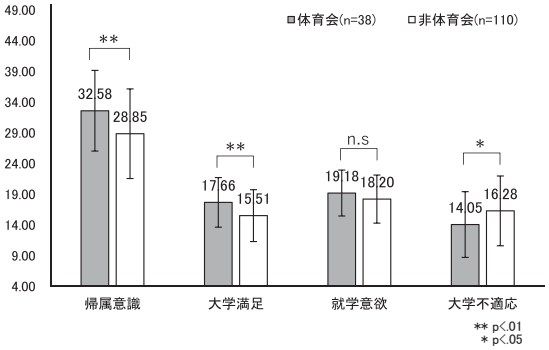


図５　一般入試群での比較結果（筆者作成）

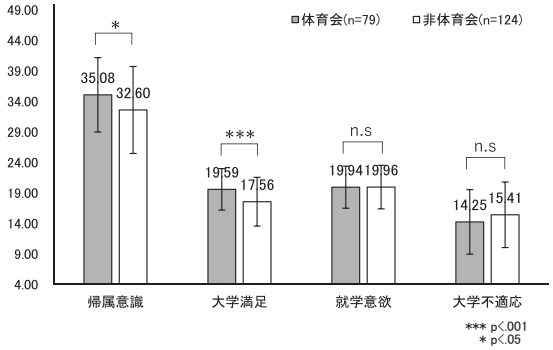


図６　１年生の比較結果（筆者作成）

### 3.2.3. 学年ごとの比較

2020 年 2 月，国内での新型コロナ感染者が増え始めたことをきっかけに，現在（2021 年 8 月時点）に至るまで，多くの大学で対面（リアル）授業が消え，オンライン授業へと移行された．本研究で対象とした大学も一部の授業（演習科目，教職科目の一部，実験・実習・実技科目など）を除き，オンライン授業となっている．すなわち，現 1，2 年生は入学以降，対面での授業機会がほぼなく，新型コロナの影響が特に大きい世代である．

そこで，1，2 年生ごとに比較を試みた．その結果，1 年生では，体育会学生の方が大学への帰属意識（$t = 2.55$　$p < .05$），大学満足（$t = 3.74$　$p < .001$）が有意に高く（図 6），2 年生も同様の結果（大学への帰属意識 $t = 2.25$　$p < .05$，大学満足 $t = 3.02$　$p < .01$）となった（図 7）．新型コロナの影響が特に大きい 1，2 年生であっても体育会に所属することで，大学への帰属意識を抱き，大学満足も高くなることが示された．オンライン授業が主流の中，体育会の活動は 1，2 年生にとって大学へ足を運ぶ貴重な機会，大学生であることの実感を得る時間となっている．そのことが今回の結果につながっていると考える．また，3，4 年生群でも体育会学生の方が大学への帰属意識（$t = 2.03$　$p < .05$），大学満足（$t = 2.41$　$p < .05$）が有意に高く，大学不適応（$t = -2.18$　$p < .05$）は低いことが明らかとなった（図 8）．

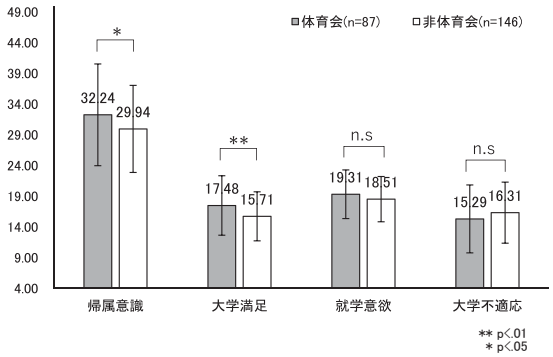


図７　２年生の比較結果（筆者作成）

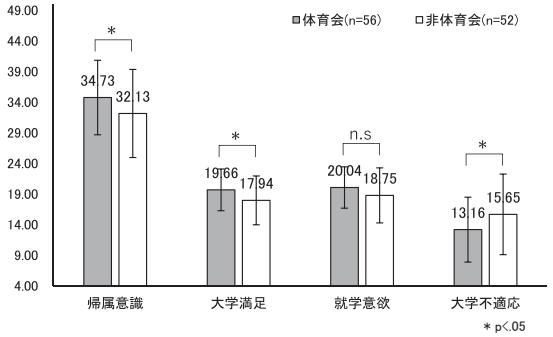


図８　3，4 年生群の比較結果（筆者作成）

一方で，それは単に大学を訪れる回数や時間の影響とも考えられ，「体育会であるが故」の影響とは言い切れない．この点については今後の課題としたいが，本研究では通常の大学生活を知る 3，4 年生（1 ～ 2 年間は対面授業等を経験している）でも差が認められたこと，たとえ来学回数が多くとも，大学を意識する環境や状況に乏しけれ

ば帰属意識が高まることはないと考えることから，体育会の意義を主張したい．

3.2.4. 性別ごとの比較

最後に，性別ごとの結果を示す．男性の結果をみてみると，大学への帰属意識（t = 3.90　p ＜ .001），大学満足（t = 4.37　p ＜ .001），就学意欲（t = 2.17　p ＜ .05）すべてにおいて体育会学生の方が有意に高く，大学不適応（t = − 2.04　p ＜ .05）は低いことが明らかとなった（図 9）．女性では，就学意欲を除く 3 項目で有意な差が認められた（図 10，大学への帰属意識 t = 2.08　p ＜ .05，大学満足 t = 3.64　p ＜ .001，大学不適応 t = − 2.58　p ＜ .05）．就学意欲では差が認められなかったものの，おおむね男女ともに同じ結果を得ることができた．このことから，性別関係なく体育会学生の方が帰属意識や満足を感じ，不適応も低いといえる．

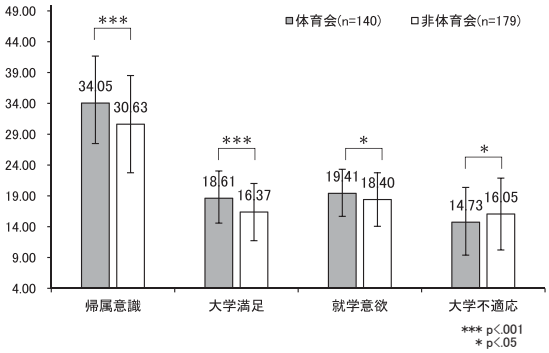


図 9　男性の比較結果（筆者作成）

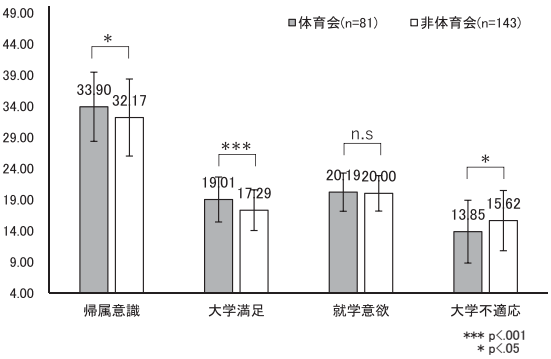


図 10　女性の比較結果（筆者作成）

## 4. まとめ

本研究の目的は，大学生を対象に体育会学生と非体育会学生において，大学への帰属意識，大学満足，就学意欲，大学不適応について比較し，両者の違いを検証することであった．分析の結果，特に大学への帰属意識について，以下のことが示された．

- 体育会学生の方が非体育会学生よりも大学への帰属意識は高い．
- 大学志望度に関係なく，体育会学生の方が帰属意識は高い．
- 一般入試による入学者において，体育会学生の方が帰属意識は高い．
- 新型コロナウイルスの影響を強く受ける 1，2 年生において，体育会学生の方が帰属意識は高い．また，3，4 年生も同様に，体育会学生の方が帰属意識は高い．
- 性別関係なく，体育会学生の方が帰属意識は高い．
- 体育会へ所属することは大学への帰属意識を高める一手段となり得る．

上記の通り，体育会学生は大学への帰属意識が高いことが明らかとなった．大学への帰属意識は大学適応を促す強力な要因（中村・松田，2014）であるため，体育会の新たな意義を示すことができたといえよう．

諸星・山口（2020）は，大学のような他の集団と比べて規模が大きい集団は愛着が生まれにくく，帰属意識が低くなると述べ，今後の課題として，学生同士の交流機会が多い集団活動を推奨し，集団への帰属意識を高めることが中途退学の減少につながると指摘している．本研究で着目した体育会は，まさに「学生同士の交流機会が多い集団活動」である．日々の活動を通し，自らが所

属するチーム，集団への帰属意識が高まる．そして，その集団が自らの居場所となり，結果として大学への帰属意識の醸成へとつながっていく．これはコロナ禍の中，また中途退学者が社会問題化される中で大学が体育会を保持する理由，ならびに学生が体育会に所属することの意義を表しているといえる．

さらに，杉本（2020）によると，スポーツ全般に対する関心の高さが体育会の活動に対する関心を導き，そして体育会の活躍によって大学に対する愛着や帰属意識が醸成され，入学に対する満足度が高まるという．つまり，体育会学生の活躍は，スポーツに関心を持つ非体育会学生の大学への帰属意識や大学満足をも高めるのである．そこではさらに，活躍している体育会の認知や体育会学生とのコミュニケーション頻度（接触）が密になることにより，非体育会学生の中で体育会の存在感が高まり，自らの自慢となっていくことも指摘されている．

すなわち，体育会という存在は所属学生だけに価値をもたらすのでなく，非体育会学生にとっても価値ある存在になり得るのだ．今後，大学は体育会の意義を発信し，所属率向上に向けた取り組みの推進のみならず，非体育会学生との接点強化にも取り組むべきだろう．例えば，教育系学部学生とコラボした子供向けスポーツ教室の企画・実践，理系学部学生とコラボしたスポーツ用品開発，芸術系学部学生とコラボしたチームのロゴマーク開発，商学系学部学生とコラボした試合観戦者増加に向けたマーケティング戦略立案，福祉系学部学生とコラボした高齢者施設慰問企画の提案，社会系学部学生とコラボした社会問題解決型スポーツイベントの企画・実践，それら活動情報をSNS等で発信する学生主体団体の設立など，できることは発想次第でいくらでも広がる．重要なことは「互いが互いを他人事と思わない工夫」である．非体育会学生が持つ強み，専門性と体育会（スポーツ）を掛け合わせ，社会や地域に貢献していく．これが体育会に求められる新たな意義や役割だと強く感じる．

一方で，運動部所属者は日常生活での不安が有意に高いという指摘もある（大石ら，2007）．無論，そもそもスポーツに興味・関心がない，体育会に所属したいが経済的に難しい，大学4年間という限られた時間の中で自らが優先すべき活動は体育会活動ではない，そんな学生は必ず，それも多数存在するだろう．我々体育・スポーツの研究者は，体育・スポーツが持つポジティブな部分や体育会に所属する学生のみに焦点を当てることが多い．しかしながら，ネガティブな部分や非体育会学生にも目を向け，すべての学生に対する体育・スポーツ分野からの適切な教育，支援，サポートを意識する必要がある．そのための研究活動も然りである．

また，コロナ禍の中，居場所を確認できない学生も相当数存在するだろう．阿部（2011）は居場所について，人が生きていくための「いのちづな」と指摘する．居場所の欠如は生死にもかかわるのだ．「本人が退学の意思を大学に伝える時点で大学側が説得をはじめても本人の意思はすでに固まっていることが多かった」と川﨑ら（2014）が言うように，潜在的に悩みを抱えている学生を見極め，早い段階での支援やサポートがこれまで以上に大学に求められる．

今後，大学が体育会を正課外教育の場として位置付けていくのであれば，繰り返すが所属学生だけに着目するのでなく，非体育会学生にも目を向け，両者の接点を強化すべきである．そして，体育会を使って何かを成し遂げる，体育会とともに何か問題を解決していく，スポーツを使って社会や地域に貢献する．そのための取り組みを共に考え，実践する場を構築していく．そのことが両者にとっての新たな居場所につながる．そんな「体育会の使い方」に期待したい．

### 参考文献

阿部真大（2011）『居場所の社会学―生きづらさを超えて―』日本経済新聞出版社．

阿知波君恵・山田浩平（2012）「女子大学生の運動行動変容の段階と健康度・生活習慣および生きがい感との関わり」『Iris health: the bulletin of Center for Campus Health and Environment, Aichi University of Education』**11**，17–22.

ベネッセ教育総合研究所「大学生の中退防止に向けて入学時退学意向の要因は何か」（https://berd.benesse.jp/koutou/topics/index2.php?id=4131）2021/3/7.

藤井義久（1998）「大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』**68**（6），441–448.

藤原誠・堺賢治（2010）「大学生のスポーツ活動に関する研究―高等学校におけるスポーツ経験との関係―」『愛媛大学教育学部保健体育紀要』第7号，21–30.

伊藤克広・大西彩希・岡野葉月・東森翔・森幹太（2016）「大学生の運動・スポーツ活動と生活満足度の関連に関する質的研究（1）『継続』と『再社会化』の視点から」『人文論集』**51**，43–52.

岩田考（2015）「『大学生』に関する総合的研究（2）大学生の生活満足度の規定要因：全国26大学調査から」『桃山学院大学総合研究所紀要』**40**（2），67–85.

河合季信・平川武仁・大高敏弘・安藤真太郎・平山素子・吹田真士・坂本道人・仙石泰雄・成瀬和弥・萩原武久（2007）「大学体育会参加者の所属・性別・学年と生活満足度の関係」『大学体育研究』**29**，13–20.

川﨑孝明・中嶋弘二・川嶋健太郎・川口恵子（2014）「大学における寄り添い型学生支援体制の構築―中途退学防止の観点からの実践的アプローチ―」『尚絅大学研究紀要人文・社会科学編』**46**，76.

金政芸（2013）「大学および学部への愛着の規定要因」『第4回社会学部卒業時調査報告書』59–72.

清宮孝文・依田充代・門屋貴久（2015）「体育系大学生の大学生活不安に関する研究」『日本体育大学紀要』**45**（1），27–37.

粂原民子・社浦竜太（2011）「大学生における居場所感と大学生活不安に関する研究―学生相談室の利用の有無に注目して―」『ものつくり大学紀要』第2号，60–65.

間野義之（2015）『奇跡の3年 2019・2020・2021 ゴールデン・スポーツイヤーズが地方を変える』（p. 1）徳間書店.

松井洋・中村真・田中裕（2010）「大学生の大学適応に関する研究」『川村学園女子大学研究紀要』**21**，第1号，121–133.

見舘好隆・永井正洋・北澤武・上野淳（2008）「大学生の学習意欲，大学生活の満足度を規定する要因について」『日本教育工学会論文誌』**32**（2），189–196.

文部科学省a「令和2年児童生徒の自殺者数に関する基礎資料集」（https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_jidou01-000012837_009.pdf）2021/8/20.

文部科学省b「新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けた学生などに対する追加を含む経済的な支援及び学びの継続への取組に関する留意点について」（https://www.mext.go.jp/content/20201218-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf）2021/3/3.

諸星眞子・山口一（2020）「集団（家族・友人・大学・アルバイト先）に対する帰属意識と自尊感情および他者受容との関連」『心理学研究：健康心理学専攻・臨床心理学専攻』第10号，44–58.

中村直文「忘れ得ぬ『部活』や『同期』―シニア，ウェブで再体験（ヒットのクスリ）」『日本経済新聞』2020/09/18.

中村真・松田英子（2013）「大学生の学校適応に影響する要因の検討―大学不適応，大学満足，就学意欲に着目して―」『江戸川大学紀要』**23**，151–160.

中村真・松田英子（2014）「大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響―帰属意識の媒介効果における性差および適応感を高める友人関係機能―」『江戸川大学紀要』**24**，13–19.

中村真・松田英子・薊理津子（2016）「大学への帰属意識が大学不適応に及ぼす影響（3）帰属意識に基づいて分類した大学生のタイプと大学不適応との関連」『江戸川大学紀要』**26**，23–31.

日経クロステック（2020）『見えてきた7つのメガトレンド　アフターコロナ』（p. 14）日経BP.

尾高邦雄（1963）『改訂版産業社会学』（p. 398）ダイヤモンド社.

大石千歳・浅見美弥子・奥野知加・渡辺博之・若山章信・今丸好一郎・中本哲（2007）「東京女子体育大学学生のライフスタイルと健康に関する調査報告その2―精神的健康に関する基礎調査―」『東京女子体育大学女子体育研究所所報』**1**，23–48.

小塩真司（2004）『SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析―因子分析・共分散構造分析まで―』東京図書.

作田良三（2007）「教職履修学生の『社会人として

の資質能力』」『大学教育学会誌』**29**（1），146–154.
「『3密』危険　SNSで」（2020.4.4）『読売新聞東京朝刊』27.
杉本龍勇（2020）「在校生の大学スポーツに対する評価が大学への帰属意識に与える影響」『法政大学スポーツ研究センター紀要』**38**，55–67.
高木浩人（2006）「大学生の組織帰属意識と充実感の関係」『愛知学院大学心身科学部紀要』2増刊号，61–67.
都筑学・舟橋一郎・八島健司・早川宏子・村井剛・早川みどり・半澤礼之（2009）「大学生の運動・スポーツ経験が身体・健康意識に及ぼす影響」『中央大学保健体育研究所紀要』**27**，1–18.
安原智久・串畑太郎・上田昌宏・栗尾和佐子・曽根知道（2021）「2020年度薬学部新入学生へのオンライン教育―学部への信頼と帰属意識をどう育てるか？」『薬学教育』**5**，1–7.
吉村洋文 Twitter　2020.7.12
（https://twitter.com/hiroyoshimura/status/1282279712866185218）.

# Identification of students who belong to sports clubs with universities during the COVID-19 pandemic

Naoya Hayashi
Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

The purpose of this study was to compare students who were members of sports clubs with those who were not in relation to their identification and satisfaction with universities, ambition to study, and maladjustment to university life. In particular, the significance of sports clubs amid the COVID-19 pandemic was examined. The results of the analysis of the 572 valid responses revealed students who were members of sports clubs had significant higher identification with universities than their counterparts who did not belong to sports clubs. Furthermore, there was significant higher identification among students in sports clubs who were attending the university of their first choice, those who enrolled at universities as a result of general entrance examinations, and among students who belonged to sports clubs and were significantly affected during the pandemic. One may deduce that belonging to sports clubs may be instrumental in heightening one's identification with universities.

Key words: Identification of students with university, Ibasho, College sports, COVID-19